

成城大学 2026 年度 全学部統一選抜 (S 方式)

2 月 2 日 : 国語

■解答例

〈注意事項〉

ここに掲載するのは解答の一例であり、その他に別解がある場合があります。

[一]

問題番号	正答
1	3
2	4
3	3
4	4
5	1
6	3
7	2
8	4
9	2
10	4
11	3
12	4
13	1
14	2
15	2
16	4
17	2
18	3
19	1
20	1
21	4
22	3
23	2
24	1

[二]

問題番号	正答
25	4
26	1
27	3
28	3
29	3
30	4
31	4
32	2
33	2
34	4
35	1
36	2
37	1
38	2
39	1
40	4
41	4
42	4
43	1
44	4
45	2
46	4
47	4
48	1
49	1

■出題意図

[一]

時間の感覚が言語表現に反映されるのは日本人の常であるが、近代になってその大きく変化したことを象徴するのが、「とき」と「時間」という二語である。前近代では「とき」だったものが、それに加えて「時間」なる語が多数を占めてゆく過程を、漱石作品などを例に追ってゆく本文は平易だが、時計の普及とともに人間の内部に計量思考が漸増し、それによって生活の中での言語の使い分け、使用の比率や頻度までが変化をきたすという議論を理解するのは、意外に難しい。設問では、そうした文脈を解きほぐすことを要求すると同時に、引用の漱石作品に引かれたのか、比較的古風な言い回しも散見され、その意味を問う問題もまじえてみた。

[二]

S問題の第二問は、従来通り現代文と古文の融合問題である。本文は、日本人が言葉というものにどういった思いを抱いているかという事例として、鎌倉時代の説話集『八幡宮巡礼記』『沙石集』や、上代の『万葉集』などにみる、とくにその言葉の呪力に注目して論じたもの。古典文中の表現の、具体的なアニミズム的内容の理解を問うことが中心となるが、それとともに文法や文学史の知識を問う問題もさしはさんだ。古典中心の問題のようにも見えるが、それらを引用する地の文が理解できれば十分に解ける問題となっている。